

輓近に於ける東洋史學の進歩

此の一篇は去る十月の史學研究會例會の席上で、現今西洋の東洋學者が一般に如何なる方面の研究に従事し、如何なる成績を擧げつつあるかを、極めて簡単に述べたものに多少の増補省略を試みたものに外ならぬ、元來本誌の如き専門の雜誌に掲載する積りはなく、ただその席に集られた比較的かゝる學問には縁故の遠い方々に自分の知つて居る範圍内に於て近時の東洋史學研究の一面を紹介したに過ぎなかつたのを、編輯の方の要求によつてこゝに登載したものであることは、豫じめ讀者の諒承を願つて置く。東洋史學の研究といふのは漢字で書いた外國の地名人名の類を還原するのが目的かといふ批難を聞いたものは、恐らく自分ばかりではあるまい。此の問題の重要なことは難者の想像以上にあることを疑はないがしかも現今斯學の進歩は、あらゆる方面に道を開いて、幸にかゝる難詰を受けるに及ばなくなつて居ることを、この短篇によつて幾分でも一般の讀者に諒解せらるゝならば望外の幸である。本篇に述べた所が全く西洋の學者の研究に止るのは、我が國の學者の寄與については、諸種の雜誌に於るそれぞれの紹介で、既に讀者の知悉して居られることと思ふからである。

一 東洋史研究の史料

從來東洋史といふ學問は支那の書物に據つて研究を進めるより外に途は無かつたといふても差支ない有様であつた、支那歷朝の正史に載せてある外國傳、もしくははその他の記録に見えて居る外國に關する諸種の記事は、實に支那以外の東洋諸國の暗黒なる歴史を研究する場合には、最も重要な炬火であつて、これなくば古來文記の存して